

未体験のWeb化社会が駆け足でやってこようとしている！

最近、気になるWeb関係本を立て続けに読みました。3冊を紹介させて頂くことにしましょう。最初の一冊は、『消えるサイト、生き残るサイト』（「SEO11の戦術」で、絶対に生き残れ！）で、著者はインターネット・ビジネス・フロンティア（株）の宇都 雅史氏。

業界内にはびこる怪しい手法を一刀両断し、その危険性を訴えるとともに、仮説検証に裏打ちされた検索エンジン対策を説く。さらに、上位表示された後、それをどう儲けにつなげていくかを「11のメソッド」として解説する。まさに小手先だけでなく「不変の検索エンジン対策とネットビジネスの成功法則」である。これは、アマゾンの内容紹介の一節。

「業界内にはびこる怪しい手法」に興味があって読んだのですが、上位表示された後、それをどう儲けにつなげていくかの「11のメソッド」にも、唸らせるものがありました。

2冊目は、『できる社長はネットで売らない WEB化社会の営業革新』で、著者は（株）WEBマーケティング総合研究所の吉本俊宏氏

「WEB化社会の営業革新」とはどんなものなか、学んでおきたいと思って読んだのですが、下記要旨（引用）のようにこれまでの経験則では対応できない未体験のWeb化社会がやってこようとしているのでした。

「実社会」とは、われわれがふだんに生活している社会である。多くの企業がビジネスを営んでいる世界であり、モノに触れたり、人と話したりすることのできるリアルな社会だ。一方「ネット社会」とは、ブラウザや電子メールソフトを通して接するインターネットの世界である。

しかし、現在では「ネット社会」は大きく成長をとげ、「ネット社会」と「実社会」の接点大幅に拡大した。われわれはいまや「実社会」と「ネット社会」の間を自由に行き来する存在である。このように密接な関係を持つに至った「ネット社会」と「実社会」を総称して、「Web化社会」と呼ぶことにする。Web化（ネット化）した実社会というニュアンスである。

企業がターゲットしている顧客たちは、ネット社会と実社会を自由に行き来しているわけだから、彼らに対するビジネスの取り組みも、ネット社会と実社会を統合して考える必要があるのだ。

最後に紹介する3冊目は、『ウェブ時代をゆく』（いかに働き、いかに学ぶか）で、著者はあの梅田望夫氏。

06年2月に『ウェブ進化論』（本当の大変化はこれから始まる）で、大衝撃（これは物語ではなく現在進行形の現実である。グーグルとネット社会の未来について、希望と不安が見えてくる / 羽生善治氏評）を与えた著者が、07年11月に「例のない時代を生きるヒント満載」（本の腰巻きから）の『ウェブ進化論』の完結篇！として渾身の書き下ろしをしたもの。

梅田氏は06年12月に、芥川賞作家である平野啓一郎氏との徹底討論！『ウェブ人間論』（「ウェブ進化」によって、人間はどう変わるのか？ 異分野の二人が徹底討論！）を出版している。

著者のわずか1年半ばかりの立ち位置とテーマ、本当の大変化はこれから始まる人間はどう変わるのか？ 例のない時代を生きる という変化を見ると、Web化社会の進化と深化にただ驚くばかりである。